研究者と巡るセメント美術

美術史研究者　坂口英伸

No.27　漆喰芸術

今回は日本のセメント美術の「先祖」ともいえる漆喰（しっくい）芸術を紹介しよう。日本でセメント美術が浸透・定着した文化的背景として、漆喰芸術の存在を無視できないと筆者は考えている。漆喰芸術の素地があったからこそ、日本でセメント美術が違和感なく受容され、広く浸潤していったのではないだろうか。

漆喰といえば、城郭の壁や土蔵のなまこ壁に使われたものが有名だ。左官道具である鏝（こて）を用いた装飾は、江戸時代中期ごろから盛んになった。漆喰に鏝で巧みに凹凸をつけて立体的に絵を描いた鏝絵、三次元的な彫刻（仏像や神像）などがその代表である。豪商や庄屋は母屋や土蔵などの室内外の壁面に漆喰装飾を施し、自らの財力を誇示するための富の象徴とした。筆者は大分県臼杵市の複数の商家で鏝絵を目にした覚えがある。同県の宇佐市安心院町の鏝絵も有名である。

日本の漆喰は消石灰（水酸化カルシウム）を主成分に、骨材・すさ（麻）・海藻のりなどの有機物を混合して練り上げた建築材料で、防水性と防火性に富む点が特徴である。漆喰は気硬性の素材であるため、主成分の水酸化カルシウムが二酸化炭素を吸収しながら硬化（炭酸化）する。漆喰で作品を制作する場合、漆喰が乾くまでに仕上げなければならないため、素早い鏝さばきが要求される。漆喰装飾は時間との勝負ともいえる。限られた時間のなかで、漆喰に細かな表現を施すことは至難の業ともいえる。熟練の技術を要するのである。

左官技術の一種にすぎなかった漆喰装飾は、たんなる左官技術を超越し、芸術の域、つまり漆喰芸術にまで高められることとなった。その立役者が卓越した技術を有する左官職人である。その代表的人物が幕末から明治期にかけて活躍した「伊豆の長八」こと入江長八（１８１５―１８８９）である。長八は現在の静岡県賀茂郡松崎町の農家の長男として生まれ、11 歳で左官の世界に入った。２０歳の時に江戸へ出て、文人画や狩野派に学ぶ一方で彫刻も学び、それらの技法を漆喰細工に応用し、数々の名作を残した。

長八の作品を鑑賞するために、北品川駅（京浜急行電鉄）で下車した。というのも、寄木神社（東品川）と善福寺（北品川）に長八の作品が残されているからだ。ただし、寄木神社の本殿の両扉内側にある鏝絵《天細女命功績図》（品川区指定文化財）は、文化の日（１１月３日）の前後の限定公開であるためスキップし、常時公開している善福寺に向かった。同寺の本堂や、山門右脇の稲荷堂の扉に鏝絵が残っている。本堂の正面・左側・右側の３面の壁に龍の鏝絵がある（図１）。しかしながら、鏝絵の大半が剥落している。説明板によると、本堂は１８０２（享和２）年に建立、１８５５（安政２）年の安政の大地震で大きく破損したため、１８６２（文久２）年に修復。しかしその後の関東大震災（１９２３年）と東日本大震災（２０１１年）に見舞われ、鏝絵の大半が剥落したという。向かって右側の鏝絵

は２/３、左側のそれは１/３が剥落しているとはいえ、その残りの部分から長八の技術の高さをうかがい知るには十分である。うねるような龍の体からは躍動感が伝わる。剥落前はさぞかしダイナミックな作品だったことだろう。虹梁（梁の一種）や木鼻（柱から突き出た部分）に施された彫刻（剥落防止のためにネットが被せられている）も長八の作だろう（図２）。こうした彫刻は通常の寺院では木彫だが、本寺では漆喰である点が特異である。

長八はその高い技量でもって、建築装飾・調度・塗額などの作品を生み出し、出品した内国勧業博覧会でも世間の衆目を集めた。長八は現在も根強い人気がある。武蔵野市立吉祥寺美術館では、２０１５（平成２７）年に「生誕２００年記念 伊豆の長八―幕末・明治の空前絶後の鏝絵師」が開催され、長八の生まれ故郷の松崎を中心とする静岡県内や、関東近郊の寺院・個人宅に伝えられた貴重な鏝絵や漆喰細工約５０点が集められた。また、長八の生まれ故郷に建造された伊豆の長八美術館（静岡県賀茂郡松崎町）では、長八の業績や作品、伝統の左官技術に触れることができる。明治時代に誕生した日本のセメント美術。それに先立つ存在として漆喰芸術の伝統があったことを改めて強調しておきたい。



図１　向かって右側の鏝絵



図２　木鼻の彫刻